論　文　要　旨

学位論文題目　心理療法初期における治療関係構築に効果的なセラピストのコミュニケーション―クライエントの視点から―

氏　　名　横田　悠季

心理療法初期における治療関係構築の質の高さが治療効果に関わり，クライエントの自己中断を防ぐことが言われている。特にクライエントの体験に基づく治療関係構築が重要であると言われている。しかし，具体的にどのようなセラピストのコミュニケーションがクライエントにとって重要であるかを明らかにした研究はほとんどみあたらない。そこで，本研究は心理療法初期における治療関係構築に効果的なセラピストのコミュニケーションをクライエントの体験から明らかにすることを目的とした。

研究1では，心理療法初期におけるセラピストの非効果的なコミュニケーションを，クライエントの自己中断の決定過程から明らかにすることを目的とした。心理療法の自己中断を経験したことがある6名の協力者にインタビュー調査を行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を行ったところ，来談前の心理状態から中断決定に至るまでの体験として，4 つの上位カテゴリーを生成した。特にセラピストの応答性に乏しさがクライエントの自己中断に関連することが明らかになった。

研究2では，理療法初期におけるセラピストの効果的な関わり方をクライエントの心理療法継続の決定過程から明らかにすることを目的とした。心理療法を終結した 11 名の研究参加者にインタビュー調査を行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を行ったところ，5 つの上位カテゴリーを生成した。特にセラピストの積極的に肯定してくれる関わり方がクライエントの継続決定に関連することが明らかになった。

研究1及び2の結果を比較した結果，セラピストの積極的な肯定が心理療法初期の治療関係構築に効果的であるという仮説を立てた。研究3では，仮説を検証する上で，肯定の言語コミュニケーション以外の変数を統制するため，心理療法模擬ビデオを使用した。うつ病群および年齢・性別をマッチングさせた健常群各 16 名に，肯定を用いたセラピスト，反射を用いたセラピストの初回面接ビデオをそれぞれ視聴してもらった。視聴後，セラピストおよび心理療法の評価をしてもらった。また，どちらのセラピストの心理療法を受けたいか選択してもらい，その理由について自由記述式で回答を求めた。分散分析の結果，肯定群のセラピストが反射群よりも好意感や信頼感の得点や，肯定感の得点が有意に高かった。一方専門性の得点には有意差が見られなかった。自由記述式回答を質的分析した結果，うつ病群では特徴に関する肯定ではなく，これまでの努力に対する肯定が印象的であると回答する傾向が見られた。

以上の結果から，セラピストの肯定は心理療法初期，すなわち基本的な関係性を築く段階で効果的であり，全般的な人間性に対して良好な評価を得やすく，クライエントのポジティブな感情を喚起させる効果があることが示された。今後，セラピストやクライエントの特性のマッチングや非言語的コミュニケーションとの関連について検討する必要がある。